アヌココロ アイヌ イコロマケンル ソンコ

アヌアヌ

国立アイヌ民族博物館ニュースレター

NATIONAL AINU MUSEUM

ANUANU 021

2025.10

ウィーン万国博覧会の会場（部分）
ÖBN, オーストリア国立図書館蔵

日本は
なぜ万国博覧会
に参加したのか？
その意義とは？
詳しくは
2ページへ！

国立アイヌ民族博物館 第10回特別展示
開館5周年記念

ウィーン万国博覧会とアイヌ・コレクション

5万人突破!!

後期展示はココに注目！ ／ 博物館Pickup! ／ 見て見て！ 園内サイン⑨ ／ 調査研究最前線⑭
国立アイヌ民族博物館からのお知らせ ／ ウポポイってこんなとこ⑱

①

国立アイヌ民族博物館 第10回特別展示 開館5周年記念

ウィーン万国博覧会とアイヌ・コレクション

AINU COLLECTION AT THE VIENNA WORLD EXPOSITION OF 1873

前期 2025 7.5 SAT.–8.31 SUN.

後期 2025 9.13 SAT.–11.16 SUN.

観覧料無料

国立アイヌ民族博物館
特別展示室

休館日●毎週月曜日
※祝日または休日の場合は翌日以降の平日

【主催】国立アイヌ民族博物館
【後援】公益社団法人北海道アイヌ協会、ドイツ連邦共和国大使館、オーストリア大使館
【特別協力】東京国立博物館
【協力】ベルリン国立博物館群民族学博物館、奈良国立博物館、石川県九谷焼美術館、石川県立歴史博物館、北海道立文書館、あま市七宝焼アートヴィレッジ、江別市教育委員会、市立函館博物館、苫小牧市美術博物館、福岡市博物館、一般財団法人伝統的工芸品産業振興協会、一般財団法人西陣織物館、渋沢史料館、北海道大学附属図書館、有田ポーセリンパーク、全日本空輸株式会社、中西出版株式会社、ハウステンボス美術館、関口忠相（日本シーボルト協会 会長）

明治政府が国の威信をかけて初めて公式に参加した1873年のウィーン万国博覧会。日本の精巧な美術工芸品を中心に地域の物産を出品し、国際舞台に躍り出ていきます。その中で、アイヌ・コレクションは北海道の物産として開拓使や博覧会事務局により収集・選定・出品されました。

1873年ウィーン万国博覧会参加の背景と意義

日本にウィーン万国博覧会への参加要請があったのは、1871（明治4）年のこと。翌年、政府は博覧会事務局を設置し、本格的な準備を開始しました。

◉なぜ参加したのか？ ～佐野常民が掲げた5つの目標～

博覧会事務局の御用掛を務めた佐野常民は、参加の意義を以下のように明確に示しました。

一、日本の天然や人造の産物の品質が優れていることを示し日本の存在をアピールすること。
二、ヨーロッパの実情を調査研究し併せて各専門分野について伝習をうけること。
三、将来日本にも博物館を建設し博覧会を開くこと。
四、日本産品の評価を上げて輸出増大を図ること。
五、各国物品の原価等を調べ、貿易のためのデータを集めること。

Point 革新的な収集戦略

政府は出品物をすべて買い上げました。この時、同じものを二点収集し、一点を博覧会に、もう一点を将来の博物館のために集めました。

当館 特別展示室

②

佐野常民

（1823～1902年）

佐賀県佐賀市生まれ。佐賀藩士として1867年にパリ万国博覧会へ派遣されました。1873年のウィーン万国博覧会では参加目的を五カ条にまとめ、博覧会事務副総裁として現地に赴きました。欧州においては赤十字活動に接し、博愛社（後の日本赤十字社）を設立しました。また、文化財の棄損や海外流出を防ぐために龍池会（後の日本美術協会）を発足し、芸術家の保護と育成にも尽力しました。

①ウィーン万国博覧会 会場写真（部分）／
東京国立博物館所蔵 Image：TNM Image Archives
②佐野常民の肖像写真 出典：国立国会図書館「近代日本人の肖像」（https://www.ndl.go.jp/portrait/）

ベルリン国立博物館群民族学博物館と連携協定を締結しました

国立アイヌ民族博物館とベルリン国立博物館群民族学博物館は、アイヌ文化の振興と普及に寄与することを目的として、人材交流、共同調査研究、展覧会の開催等で協働するため、2025年4月23日に連携協定を締結しました。
両館が収蔵するアイヌ民族資料は、アイヌ民族の文化振興にとって極めて重要なものです。その取扱いに際しては、先住民族アイヌの尊厳を尊重し、アイヌ文化に深い敬意を払うとともに、今後その継承者と協力しながら、両館の相互連携を進めていきます。

フンボルト・フォーラム（ベルリン）

締結式の様子（左から、野本館長、佐々木名誉館長、ラース・クリスティアン・コッホ館長（ベルリン国立博物館群民族学博物館およびアジア美術館））

関連イベント Event

特別展示 スペシャルトークイベント

10/4(土) 10:30～12:00

ベッティーナ・ツォルン氏（ウィーン世界博物館）と飯田茂雄氏（東京国立博物館）による、スペシャルなトークイベントです。

スペシャルギャラリートーク

10/25(土) 14:00～14:30

飯田茂雄氏（東京国立博物館）による展示資料や本展のみどころを紹介します。

ギャラリートーク

本展を企画した担当者が特別解説を行います。

10/5(日)、13(月・祝)、18(土)、26(日)
11/1(土)、3(月・祝)、15(土)、16(日)
各日14:00～14:30
（※11/3は10:30～/14:00～の2回）

バックヤードツアー

10/4(土) 14:00～15:00

展覧会の準備など博物館の裏側を紹介！

• • •

ココでしか聞けない話が盛りだくさん！全てのイベントは参加無料（ただし、ウポポイ入場料が必要）。詳しくはウェブサイトをご覧ください。

【関連シンポジウム】海外アイヌ・コレクション調査のこれまでとこれから

10/13(月・祝) 13:00～

会場：北海道立道民活動センター（かでる2・7）
520研修室
札幌市中央区北2条西7丁目
道民活動センタービル

詳しくは当館ウェブサイト
特設ページをご覧ください

次ページで後期展示のみどころとなる資料を紹介します！

国立アイヌ民族博物館 第10回特別展示 開館5周年記念

ウィーン万国博覧会とアイヌ・コレクション

AINU COLLECTION AT THE VIENNA WORLD EXPOSITION OF 1873

後期展示はココに注目！

9月13日(土)から、後期展示が始まりました。後期の展示替え資料の中から、3章、4章のものを中心に紹介します。また、オリジナル商品に注目してみましょう！

3章 ウィーン万国博覧会の前夜 ―アイヌ・コレクションからみる博覧会への出品―

手ぬぐい掛け

木製の手ぬぐい掛けです。アイヌ自身が使うのではなく、筆軸、筆立て、糸巻と合わせて「蝦夷土産」といわれた贈答品で、献上品として和人向けに贈られた記録もあります。

分割されて作られるものが多い中、これは鎖になっているところを含め全てが一本の木から彫り出されており、その卓越した技術に驚かされます。またバランスの取れたデザインも魅力的です。

製作者は斜里村の平助と記されています。連続する斜め線や曲線の彫りが特徴的な装飾は、ほかにイクパスイや煙草入れにも見られ一定数の作品が残されているようです。

ウィーン万国博覧会 選定品 1872～73(明治5～6)年収集/北見国 斜里郡/開拓使収集/平助 作/東京国立博物館蔵　Image：TNM Image Archives

4章 ウィーン万国博覧会のあと ―樺太千島交換条約とアイヌ・コレクション―

夏用長靴(獣皮)(カムチャダール)

ウィーン万国博覧会後の1875年、樺太千島交換条約の締結により、前時代まであいまいであった国境がロシアとの間で画定され、日本の「内」と「外」がつくられます。それにより、国家により生活圏が分断された樺太と千島のアイヌ民族が、強制的に移住させられ、「日本国民」となっていきます。

4章では、条約締結後の過程で収集されたアイヌ民族と北方民族のコレクションを紹介しています。千島の近況を実地調査した開拓使は、カムチャツカ半島のペトロパブロフスクでカムチャダールの衣類などを収集しています。中でも、獣皮製の長靴は、素材の色がグラデーションで配色されていて、デザイン性の高さが見て取れます。さらに、その種類が豊富な点も魅力です。

1875(明治8)年収集/ロシア ペトロパブロフスク/開拓使/市立函館博物館蔵

G
GOODS

オリジナルグッズ

衣服(草皮) テタラペ

今回の展覧会では、展示されている資料に関するグッズが新たに7種類作成され、ミュージアムショップで購入することができます。中でも一際目を引くのが、樺太のテタラペに関するグッズです。
このテタラペは主にイラクサの繊維で作られています。たて糸の数か所にオヒョウの糸が織り込まれ、たて縞が作られています。その生地に紺や水色の布を貼り付け、その上から色糸で刺繍を施します。
しおりやチケットホルダー、絵はがきなどのグッズにもなっていますので、展覧会を見る際は展示資料と併せて、ぜひご覧ください。

グッズの参考となった衣服(草皮)/テタラペ/東京国立博物館蔵

今回展示しているテタラペをモチーフにしています。

展覧会図録

当館ミュージアムショップ・オンラインショップでは、本展覧会の図録を販売しています。
本展の前期・後期に展示される資料について研究員・学芸員が解説を加えた一冊です。ご来館の際には、ぜひお手に取ってお楽しみください。

展示会 オリジナルグッズ一覧

①チケットホルダー ポケット付き テタラペ
②A4クリアファイル チタラペ(ゴザ)
③A4クリアファイル コンチ(頭巾)
④ブックマーク テタラペ
⑤ふせん
⑥ポストカード9種
⑦A5フラットノート カロプ

当館オンラインショップはこちら→

国立アイヌ民族博物館の収蔵、展示資料をピックアップして紹介します。

博物館Pickup!

Neue Karte von der Nordostküste von Asien und den Japanischen Inseln

この地図は、1805年に神聖ローマ帝国で出版されたものです。タイトルは「Neue Karte von der Nordostküste von Asien und den Japanischen Inseln」。訳すと「アジア北東部沿岸と日本列島の新地図」といったところでしょうか。

この地図のもととなったのは、ブロートン率いる英海軍プロヴィデンス号が行った日本近海の探検航海(1796～1797年)です。当時、現在の北海道を含む日本近海や北東アジア地域は地図上の「空白地帯」とされ、さまざまな推測がなされました。その真相を「発見」するため、ブロートン以前にも数々の探検家がこの地域を訪れています。ただ、当時の航海は帆船によるもので、風や潮、天候に大きく左右され、危険がつきもの。まさに命がけでした。

彼ら探検家が危険を冒してまで「発見」しようとした一方で、「空白地帯」と見なされていた北東アジアの各地域には、当然、アイヌ民族や和人を含めたさまざまな民族が暮らし、交流が行われてきました。そして、その一端について探検家などが記録を行い、今日の私たちはその記録を通して当時の「空白地帯」の様子を垣間見ている、というわけです。この地図のもととなる探検航海を行ったブロートンもまた、記録を残した一人です。その記録には、アイヌ民族との交流の様子や、衣服や装身具、生活についての推測などが描写されています。中には和人に妨げられながらもアイヌ民族と交流するエピソードなども記録されており、当時の交流について考えさせられるものとなっています(この記録についてはどこかで詳しくお話しできればと思います)。

不完全にも見える一枚の地図にも、このように時代の背景が多く含まれていることがおわかりいただけたでしょうか。当然のように世界地図を思い浮かべ、国境に囲まれた今の私たちからすると、昔の人びとが残した地図や記録は不完全であり、生活や交流の様子は想像し難いものにも思えます。しかし、実際には地図に描かれずとも土地はあり、その土地にはすべてが記録されずとも人びとがいて、そこでは文化が受け継がれてきました。そして何より「はっきりと線引きされた国境」がなかったからこそ、さまざまな場所で、さまざまな形で交流が行われていたのではないでしょうか。

残された資料を基本として厳密に検証していくことは歴史研究の上では当然のことです。その一方で、「記録がないということ」が必ずしも「存在しないということ」にはならない、ということをこの地図は伝えてくれている、そんな気もします。読者の皆さんも当館でこの地図やほかの古地図をご覧になられた際には、当時の人びとの営みやその背景に思いを馳せてみてください。

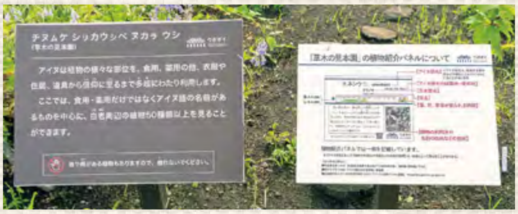
(エデュケーター　三木暁了)

※本稿におけるブロートンの航海記の記述内容は、ウィリアム・ロバート・ブロートン.『ブロートン北太平洋航海記』. 吉田俊則訳, 東洋書店新社, 2021. に拠ります。

見て見て! 園内サイン

ウポポイの園内サインをご紹介し、皆さまにより広くアイヌ語を知っていただくコーナーです!

9 チヌムケ シㇼカウシペ ヌカㇻ ウシ　草木の見本園



ウポポイでは“私たち(ここではウポポイ職員のこと)・が選んだ・地面に生えているもの・を見る・所”という表現で、“草木の見本園”を意味する言葉として使用しています。

アイヌは植物のさまざまな部位を食用、薬用のほか、衣服や住居、道具や信仰に至るまで、多岐にわたり利用します。

ここではアイヌが利用してきた植物を季節ごとに100種類以上まとめて見ることができ、それぞれにアイヌ語名、日本語名、学名、葉や花・果実が見られる時期、植物の利用法や名前の由来などの説明がつけられています。季節によって、違った植物の姿を見ることができるのも楽しいですよ。

ウポポイにいらした際には、ぜひ“チヌムケ シㇼカウシペ ヌカㇻ ウシ”もご覧ください。　(学芸員　川上さやか)

当館の研究プロジェクトを中心とした研究成果を紹介します

調査研究最前線 14

The forefront of investigation and research

Report

研究プロジェクトタイトル（日）：2023B03

日露のアイヌ資料収集者の日記・書簡資料を中心とした20世紀初頭の樺太先住民族のコレクション形成史に関する研究

メンバー
是澤櫻子（代表）
田村将人

1 収集の過程を問う

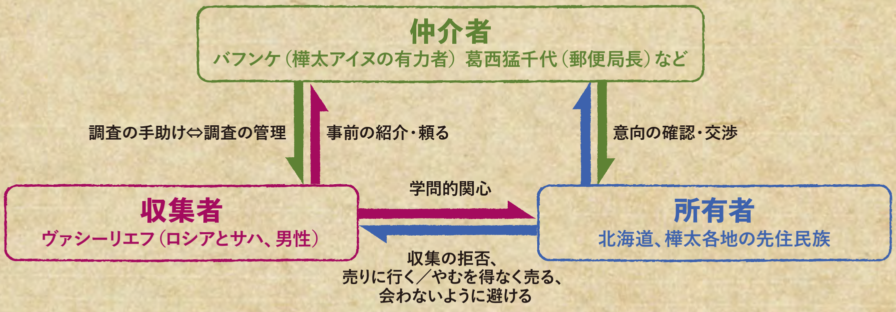
今日、博物館や大学に伝わるアイヌ民族の資料は数万点を超えています。これらの資料は、誰が、どのような目的で、どのような経緯で収集したものなのでしょうか。本研究は、20世紀初頭に樺太の先住民族の資料を収集した和人、ロシア人などの日記や書簡、野帳の整理・分析を通して、アイヌ資料の収集の過程を明らかにすることを目的にしています。特に、資料の所有者と収集者の出会いを仲介した「仲介者」の役割に注目し、現地住民と収集者の間にどのような出来事が生じたのか、どのような関係が築かれたのかに注目しています。

2 仲介者の役割

20世紀初頭の樺太南部では、ブロニスワフ・ピウスツキ（1866～1918年）やヴィクトル・ヴァシーリエフ（1877～1931年）、石田収蔵（1879～1940年）など、さまざまな民族的背景や経歴をもつ人びとが樺太アイヌ、ニヴフ、ウイルタの生活に関心をもって調査や資料収集を行いました。行政や漁場のネットワークをつかって各地を訪れる彼らを案内した人の中には、樺太アイヌやニヴフなどの先住民族、現地の行政や教育機関で働く和人の職員などがいました。本研究では、ニヴフの日沼桃太郎（プニオン）や、樺太アイヌのバフンケ、樺太庁の吉岡信平、郵便局長の葛西猛千代など、仲介者の属性や、彼らがもつ複数の役割について検討しました。例えば、板橋区立郷土資料館所蔵の数千点にのぼる石田収蔵の資料には、吉岡信平やプニオンに関するものがあります。吉岡は、ニヴフ語の通訳で1912年と1913年の拓殖博覧会に関与しました。プニオンは1912年の拓殖博覧会に参加し、その後も石田の調査の案内役を務めました。石田の資料には、背広を着たプニオンの写真や、石田の「土産物」に対して礼を述べるプニオンの葉書があります。また、吉岡が石田へニヴフやウイルタの衣服などの購入を斡旋していたこともわかりました。

日沼桃太郎から送られたお礼状（板橋区立郷土資料館蔵）

一方、石田の調査と同じ時期、ヴィクトル・ヴァシーリエフは1カ月半で約2,500点の資料を収集しました。しかし、ヴァシーリエフの来訪に対して、樺太東海岸の有力者として名高いバフンケは、自分たちの大切なもの、特に信仰に関わるものは売ってはならないと村の人たちに事前に伝えていました。それゆえ、ヴァシーリエフがバフンケの地で購入できたものはわずかでした。資料収集において、仲介者は、収集者の手助けをするだけではなく、その内容をコントロールしようと収集を管理する側面も有していたことが伺えます。



収集者、所有者、仲介者の関係図
※ヴァシーリエフの場合、筆者作成

3 収集とは何か

石田収蔵の1907年の樺太調査に関する野帳には、樺太アイヌが資料を手放さなかったことについて、祖先から伝わった品物を他人に売り渡すことは人に笑われることであり、決してそれらを売り渡さないという記述があります。

自分たちの生活道具や祖先から伝わる宝物の継承に、どのような所有者の想いがあったのか。アイヌ資料の収集は、時代や地域によって、その意図や特徴が大きく異なります。一つ一つ実証的な研究を積み重ねていくことが、アイヌ・コレクションの形成史を記す一助になると考えています。

（研究員　是澤櫻子）

参考文献
Васильев В.Н. 1914 “Краткий отчет о поездке к айнам островов Иезо и Сахалина” Отчет Этнографического отдела Русского музея императора Александра Ⅲ за 1912 год. СПб., С. 41–62.（翻訳は（2004）「エゾおよびサハリン島アイヌ紀行」、荻原眞子訳『北海道立アイヌ民族文化研究センター研究紀要』10、153-177頁）
田村将人 2011 「1912年、サハリン先住民と研究者、行政の三者に関するメモ」『北海道開拓記念館研究紀要』第39号、117-124頁
出利葉浩司（研究代表者） 2009 科学研究費助成事業研究成果報告書「明治期北海道におけるアイヌ・西洋人・エージェントをめぐる文化人類学的研究」

国立アイヌ民族博物館からのお知らせ

国立アイヌ民族博物館第９回テーマ展示「収蔵資料展（仮）」

【会期】2026年1月10日㈯～2026年2月22日㈰
【主催】国立アイヌ民族博物館

国立アイヌ民族博物館は、アイヌの歴史や文化を展示する博物館となることを目的の一つとし、国内外に保管されているアイヌ文化関連資料を調査しています。また資料は、購入・寄贈・寄託という方法で収集し保存しています。本展覧会では、資料の収集や保存といった利用者からは見えない博物館の仕事の紹介を主軸とし、近年収集した収蔵資料の公開とともに、資料保存の一環である列品修理についても展示します。普段の展示からは知ることができない博物館活動の舞台裏の紹介を通して、私たちのアイヌ資料を次世代に繋ぐための取り組みにふれてみてください。

ウポポイってこんなとこ18 伝統芸能上演

アイヌの伝統芸能は、儀礼や日常のさまざまな場面で演じる、生活に欠かせないものです。
ウエカリ チセ（体験交流ホール）では、各地の伝承者に協力をいただきながら、
さまざまな時代の伝統芸能を伝承・復興し、その魅力を伝えています。
より深く楽しんでいただけるよう、ウエカリ チセで上演している各プログラムを紹介します。

通常プログラム　毎日上演

シノッ（所要時間 約20分）／伝承のかたち

北海道の美しい自然を背景に、各地で受け継がれてきた歌や踊り、楽器の演奏など、さまざまな伝統芸能を披露します。
各地の伝承者から直接ご指導いただき、各地に受け継がれた演目を紹介しています。
時間帯によって、違った演目を見ることができます。

イメル（所要時間 約20分）／再生のかたち

世界各地に残された貴重な音声や映像から歴史に埋もれた歌や踊りを復元しました。
イメル（稲光）が照らす舞台で、伝統芸能の新しい可能性に挑戦します。
光の演出にもご注目ください。

特別プログラム　不定期上演

スクシ（所要時間 約25分）／交流のかたち

幕を開けスクシ（日差し）を取り込んだ舞台で、儀礼や日常のさまざまな場面で演じる舞踊を披露します。4公演のうち唯一お客様参加型の新しいプログラムで、公演の最後には、スタッフと一緒にシチョチョイ（豊作の踊り）を体験できます。

イノミ（所要時間 約25分）／創造のかたち

アイヌの精神文化を象徴するイヨマンテ（熊の霊送り）では、数多くの歌や踊りでカムイをもてなします。
イノミでは、儀礼の流れを再現する中でイヨマンテの精神を紹介します。
イヨマンテについて見聞きする機会が少なくなった現代で、踊りの原点ともいえる祈りの心を表現します。

※ウポポイウェブサイトでプログラムのスケジュールを公開しています。

人権啓発のお知らせ

令和元年5月に施行された「アイヌの人々の誇りが尊重される社会を実現するための施策の推進に関する法律」では、アイヌの人々へのアイヌであることを理由とした差別の禁止に関する基本理念などが新たに定められています。
法務省の人権擁護機関では、アイヌの人々に対する偏見・差別をなくし、アイヌの人々に対する理解と認識を深めるよう、人権啓発活動や人権相談（みんなの人権110番 ☎0570-003-110）、調査救済活動に取り組んでいます。

アイヌの人々の人権に関する啓発動画
「アコロ青春　a=kor　アコロ〔アイヌ語で「私たちの」〕」
が公開中です。ぜひご覧ください。
【動画掲載URL】https://youtu.be/V6DGN1ekTjQ

出典：法務省ウェブサイト
https://www.moj.go.jp/JINKEN/jinken05_00004.html

NATIONAL AINU MUSEUM
国立アイヌ民族博物館
https://nam.go.jp/

ウポポイ
NATIONAL AINU MUSEUM and PARK
民族共生象徴空間

■お問い合わせ
公益財団法人 アイヌ民族文化財団（ウポポイ内）
住　所：〒059-0902 北海道白老郡白老町若草町2丁目3番1号
電　話：0144-82-3914　FAX：0144-82-3685
メール：info@ainu-upopoy.jp

プログラム等の詳しい情報はウポポイウェブサイトをご覧ください。
ウポポイ　検索
https://ainu-upopoy.jp/

※アヌアヌは、アイヌ語で「もしもし」の意味です

国立アイヌ民族博物館ニュースレター「アヌアヌ」第21号　編集・発行：国立アイヌ民族博物館　2025年10月発行　印刷：TOPPAN株式会社　ISSN 2435-8207